

Title	『中原音韻』に見える周徳清の方音
Author(s)	佐々木, 猛
Citation	大阪外国語大学論集. 13 p.57-p.61
Issue Date	1995-09-29
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79671
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『中原音韻』に見える周徳清の方音

佐々木 猛

The Dialects of Zhōu Dé Qīng found in “Zhōng Yuán Yīn Yùn”

Takeshi SASAKI

1. 『中原音韻』の舒声の部分において同音小韻の重出は11例が確認できる。

18鹽咸の韻には重出小韻が集中して4例を数えるが、そのうち平声陰の

「12嵌 k'iam」

「13鵠 k'iam」

はともに1字のみから成る小韻であり、いずれも『中州楽府音韻類編』には存在しないものであった。「嵌」字は『廣韻』では下平声27銜にあって「口銜切」の音をもち、「鵠」字は下平声26咸にあって「苦咸切」の音であった。『廣韻』のこの兩韻に属する字は『中原音韻』においてはすべて18鹽咸の韻に収められ、声母を同じくする字はそこでは同音になっている。現代普通話においても「嵌」「鵠」の兩字は同じく [tɕ'ien] 平声陰の音である。

またこの2小韻は1字のみから成るのに韻末に置かれることがなく、『中原音韻』の体例から見て異例となるのである。さらに上に示した小韻番号から分るように、この2小韻は連続して配列されていて、その間の「○」印は伝写の誤りによるものであると考えることができる。

以上のことから見てわたくしはこの2小韻は実は同音の小韻であり、併せて一つにすべきである¹⁾と考える。

上声において重出する

「34坎 k'am」

「35砍 k'am」

もともに1字からなる小韻であるが、『中州楽府音韻類編』では上声の韻末にあって「坎砍」の1小韻を形成している。そのうち「坎」字は『廣韻』の上声48感にあって「苦感切」の反切が注されている。「砍」字は『廣韻』『集韻』などには見えないが、『篇海類篇』地理類、石部に「苦感切、

砍, 斫也」とある。とすれば『中原音韻』においてもこの2小韻は実は同音であったと考えられる。また両字は現代普通話においても同音の [k'an] 上声である。

この2小韻も1字のみから成るのに韻末に置かれることはなく、『中原音韻』における異例となる。しかも連続して配列されていて、その間の「○」印を伝写の誤りによるものとするならば、この2小韻も実は同音の小韻であり、併せて一つにすべきであるということができる²⁾。

上声にはさらに1字のみから成る

「37俺 iam」

「39黯 iam」

の2小韻が重出している。この2小韻は『中州楽府音韻類編』においては「25俺」「26黯」のように連続して配列されている。この2小韻の間の「空」は実は伝写の誤りによるものであったが、周徳清はこれを本来のものとして考えて2小韻に分けたのであろう。またそれぞれが1字のみから成る小韻であるので、さらにこれを韻末に移したのであろう。これは『中原音韻』編纂において周徳清の犯したミスであった。わたくしは『中州楽府音韻類編』の「25俺」「26黯」の2小韻の間の「空」は伝写による誤りであり、この2小韻は合併して「25俺黯」の1小韻にすべきであるとする。『中原音韻』もこれを2字から成る小韻として扱うべきであった³⁾。

2. ところが去声の

「42勘礪 k'am」

「48瞰嵌闕 k'am」

の2小韻は連続して配置されてはおらず、その間の「○」印を伝写の誤りによるものであるとして単純に1つに合併させることはできない。また韻末に配置されているのでもなく、のちの増加字であるということもできない。一方、『中州楽府音韻類編』においてもこれらは

「36勘 k'am」

「43瞰嵌 k'am」

のように連続しない2小韻として存在して、状況は『中原音韻』と同じである⁴⁾。

寧繼福1985はこの2小韻を次のような異なる音節を代表するものと想定している。

「勘礪 k'am」

「瞰嵌闕 k'iam」

これは恐らく後者に「嵌」の字が含まれることによるのであろう。この字は『廣韻』には収められていないが、現代普通話は [tɕ'ien] の去声である。

しかし寧氏自身もその注記にいうように、『廣韻』においては「勘礪」の両字は「苦紺切」, 「瞰闕」の両字は「苦濫切」である。いずれも『中原音韻』においては同音となるものであり、現代普通話においてもともに [k'an] の去声である。それゆえ上述のような寧氏の処置には無理があると

考えられる。さらに「嵌」字も『集韻』の「苦濫切」の音に従えば『中原音韻』において [k'iam] ではなく [k'am] の去聲となり、ともに小韻を構成している「瞰闕」字と同音になる。つまり寧氏の再構音は次のように改めなければならないのである。

「42勘礪 k'am」

「48瞰嵌闕 k'am」

陸志韋1978は「中原音韻校勘記」においてこの2小韻の重出はたいへん疑問であるといい、一方「中州楽府音韻類編校勘記」においてはこの2小韻は合わせるべきであるという。しかしわたくしは『中州楽府音韻類編』や『中原音韻』の体例から見て、テキストの誤りとして合併してよい小韻はそれが連続して並んでいる場合に限るべきで、ここはそれに当てはまらなないと考える。

3. 一方、目を現代贛方言に転ずれば、中古音の一二等重韻に属する字は殆どの場合同音となっているが、覃談兩韻（平聲を挙げて相配する上去入聲を兼ねる。以下同じ）のみがそれぞれ異なった韻母となることに気がつく。一般的には牙喉音聲母の字は覃談兩韻いずれものものも韻母は -om に読み、舌齒音聲母の字の覃韻に属するものは -om に、談韻に属するものは -am に読む。

たとえば江西高安の音では

「甘」「感」「敢」字はすべて kom

「痰」字は t'am, 「暫」字は ts'am

「探」字は t'om, 「参」字は ts'om

である⁵⁾。

さらに江西臨川の音では覃談兩韻の牙喉音聲母の字をも区別していて、いま問題になっている2小韻の各字を見ると

「勘」字は k'om の陰去聲

「瞰」字は k'am の陰去聲

となり、中古音1等重韻の韻母の差異を反映していることが分る⁶⁾。「勘」字は『廣韻』では勘韻（覃韻の去聲）に、「瞰」字は闕韻（談韻の去聲）にそれぞれ属している。

周德清は江西の人であった。そして生涯その地を離れることはなかったと考えられる⁷⁾。わたくしはこの2小韻の分立

「42勘礪」

「48瞰嵌闕」

は陸志韋らがいうような『中原音韻』の編集上の誤りではなく、その編集の過程において江西臨川音のような周德清自身の方言音がここにはからずも露呈したものではないかと考えるのである。

『中原音韻』18鹽咸音節表 () を附したのは『中州楽府音韻類編』に存在しない小韻。

韻 母	am				iam			
声 \ 調	平声陰	平声陽	上 声	去 声	平声陰	平声陽	上 声	去 声
p								
p'								
m								
f								
v								
t	擔 2		膽 28	淡 45				
t'	貪 8	覃 20	毯 32	探 54				
n		南 17	(喃) 41					
l		婪 19	覽 27	濫 47				
ts	簪 11	簪 25	(答) 36	暫 51				
ts'	參 9	蠶 21	慘 29	慘 56				
s	三 5		糝 38	三 53				
tʂ	(詰) 14		斬 40	蘸 49				
tʂ'	摠 16	諛 23		(饑) 57				
ʂ	杉 7							
ʮ								
k	甘 6		感 26	顛 43	鹽 3		減 33	鑑 50
k'	堪 4		▽(坎) 34	▽勘 42	▽(嵌) 12			
x	愁 10	含 22	喊 31	憾 44		咸 18		檻 46
∅	菴 1		揅 30	暗 52	渰 15	巖 24	▽俺 37	渰 55

▽ 砍 35 ▽ 瞰 48 ▽(鵠) 13 ▽ 黯 39

注

- 1) 『中原音韻』においては1字から成る小韻は各韻末に配列している。小韻を隔てる「○」印のことや『中州楽府音韻類編』については佐々木1981を参照されたい。
- 2) このように重出小韻の大半は何等かの形で処理できるもので、真の重出小韻として残るのは舒聲部分については4例あるいは3例があるのみである。詳細は未刊の別稿『『中原音韻』の重出小韻』において述べる。
- 3) 『中州楽府音韻類編』が「空」によって小韻を分けること、及びそれにとまなう問題点については佐々木1979、佐々木1981を参照されたい。
- 4) 楊耐思1981も「“勘”，“瞰” 兩小韻重出，卓從之同。《韻會》，《蒙古字韻》皆作同音。《中原音韻》兩小韻重出，極可疑。」という。
- 5) 顔森1981。但し例外的な音もある。たとえば「譚」「耽」はともに覃韻の字であるが、それぞれ t'am, iam である。

- 6) 羅常培1940。ここにも例外はある。たとえば「甘」「敢」は談韻の字であるが、kom である。
7) 佐々木1994。

文 献

- 陸志韋 1978 『中原音韻』中華書局。
羅常培 1940 『臨川音系』(歴史語言研究所単刊之17) 商務印書館。
寧繼福 1985 『中原音韻表稿』吉林文史出版社。
顏森 1981 「高安(老屋周家)方言的語音系統」『方言』1981-2。
楊耐思 1981 『中原音韻音系』中国社会科学出版社。
佐々木猛 1978 「中原音韻と中古音及び現代音」(未刊)。
1979 「中原音韻・正語作詞起例・訳注」京大中文研究室『均社論叢』8。
1981 「『中州樂府音韻類編』によって『中原音韻』に含まれる誤りを正しうるか」『福岡大学人文論叢』12-4。
1994 「周德清は大都を見たか」『大阪外国語大学論集』11。

本稿は平成六年度文部省科学研究補助金(課題番号06045024)による研究成果の一部である。

(1995. 5. 10 受理)